



発見!! 地域の祭り

身近なまちの
文化財ガイドブック

本ガイドブックは、地域に伝わる「祭り」の魅力、祭りに携わる方々の思いを伝えるために発行しました。名古屋市内にはたくさんの祭りが継承されており、そのどれもが地域の特色を持った唯一無二のものです。こうした祭りを後世に引き継ぐためにも、実際に祭り会場へ足を運び、祭りの応援団になっていただければ幸いです。



INDEX

- ① 鯨形祭り — P 1-2
(毎年5月5日)
- ② 洲崎神社ちょうちん祭 — P 3-4
(毎年7月第3土曜日・日曜日)
- ③ 針名神社天王祭 — P 5-6
(毎年7月第3月曜日<祝日>)
- ④ 一色まつり — P 7-8
(隔年7月26日より前の土曜日)
- ⑤ 蛇池神社万灯流し大祭 — P 9-10
(毎年8月20日)
- ⑥ 大高祭り — P 11-12
(毎年10月第1日曜日)
- ⑦ 烏森三社秋祭り — P 13-14
(毎年10月第2月曜日<祝日>)



見学に行かれる皆様へお願い

- 冊子は令和2年3月の情報です。最新情報をお確かめの上、お出かけください。
- 参加者の皆様の妨げにならないよう、ご配慮をお願いいたします。
- 立ち入り禁止の場所には立ち入らないようにしてください。
- 祭り会場へは公共交通機関をご利用ください。

発行 なごや歴史文化活用協議会

(問合せ) 名古屋市教育委員会 文化財保護室
名古屋市中区三の丸3丁目1-1 電話 052-972-3220
a3268@kyoiku.city.nagoya.lg.jp

平成31年度文化芸術振興費補助金(地域文化財総合活用推進事業)

祭りの情報を発信しています。詳しくはこちらをご覧ください。

<http://www.city.nagoya.jp/kyoiku/page/0000127351.html>



くわ がた 鍬形祭り

開催日 毎年5月5日
主催 笠寺学区公民会

半世紀以上の 時間を経て 子どもが主役の 祭りが復活

戦争の影響で 途切れた歴史

「鍬形」とは武将が被る兜の額の部分につける角状の立物のこと。南区笠寺周辺では、この鍬形をシンボルとした祭りが行われている。その名も鍬形祭りだ。昭和初期まで行われていたが、太平洋戦争の影響で昭和17(1942)年を

最後に途絶えてしまった。現在、毎年5月5日に行われている祭りは、63年ぶりとなる平成17(2005)年に復活したものだ。

運動会と合わせて 現代風に復活

祭りの主役は子どもたちだ。5月5日の朝、笠寺学区の24町内から参加者が笠寺観



Y字形に華やかな紙飾りが付いた木製の鍬形。かつての鍬形には紅白の御幣が付いていた。

軍配のように隊列の先頭を持つ。小学6年生が「親方」という。

太平洋戦争の影響で途絶えるまで
南区笠寺町一帯で行われていた鍬形祭り。
地域の伝統や文化を継承するため、
平成17年に63年ぶりに復活した。
内容は変わったが、
その心意気は受け継がれている。



笠寺観音に集まる参加者たち。現在は練り歩きのスタート地点だが、かつては目的地だった。

音(笠覆寺)に集合すると、町ごとに隊列をつくり、境内を出發。七所神社の横を通過して笠寺小学校まで約1kmの道のりを練り歩く。
隊列には、鍬形を担ぐ者、ほら貝を吹く者、杖のようにして竹棒を持つ者もいる。
「チョーサンヨ、ハーサンヨ、ニワーカーニ、ホンマニツイター」
プップクプーという、ほら貝の音とともに、子どもたちからは、独特の節回しの掛け声聞こえてくる。祭りを主催する笠寺学区公民会の会長は「ホンマとは馬のことだと聞いていますが、あとの意味については詳しく分かりません。この祭りで馬を出したという話を聞いたことはないですね」と話す。

戦前の祭りでは 鍬形の争奪戦も

戦前の鍬形祭りは、笠寺から本屋崎周辺で行われたという。現在は女子も参加するが、かつては小学生の男子のみが参加した。鍬形を担いでそれぞれの集落(組)を練り歩いたのち、笠寺観音に集合。鍬形を持ち寄って本堂を三回まわってお参りをしたそうだ。

こういった町々による鍬形の奉納は、江戸時代にこの地域で大いに流行した「馬之塔(飾り立てた馬を社寺に奉納する行事)」や、竿の先に趣向を凝らした造り物を付けて練り歩く「梵天祭り」との関わりをうかがわせる。独特な掛け声の「ニワカ」は「俄馬」、
「ホンマ」は「本馬」のことを意味するかもしれない。

「祭りの起源は、戦国時代までさかのぼるとも聞きます。忘れ去られていた『鍬形』という言葉が復活したことに意味があるのでは。この祭りが地域の歴史や文化に目を向ける



かつての鍬形の奪い合いをやめる代わりに、学区の運動会が行われている。

かつての鍬形祭りでは、帰る道すがら、よその組と、騎馬戦のように「鍬形」を奪いあった。組の威信をかけ、激しいぶつかり合いが繰り広げられたといい、参加した人の

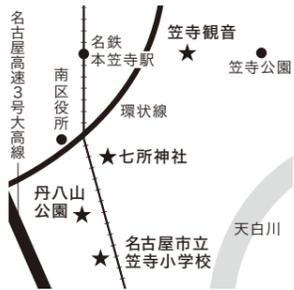
記憶に印象強く残る。
南区や緑区では、練り歩いて神社に参詣する祭りが今も広く行われているが、聞くところによると、祭り道具を隣組と奪い合うことがしばしば起こったという。
鍬形祭りも、そうした祭りの雰囲気を引き継ぐものだと
言える。



笠寺観音を出發した隊列がゴールの笠寺小学校に到着

SCHEDULE

- 09:00 笠寺観音に集合
- 09:20 笠寺観音を出發
- 09:40 笠寺小学校到着
(ほら貝とともに掛け声)
- 10:00 運動場にて式典
- 10:30 学区運動会
- 11:30 終了



※1 俄馬(にわかうま):「馬之塔」と呼ばれる馬を奉納する行事に出てくる、荒縄で縛られた馬のこと
※2 本馬(ほんうま):「馬之塔」と呼ばれる馬を奉納する行事に出てくる、華やかな飾り物で、飾り立てた馬のこと

洲崎神社 ちようちん祭

開催日 毎年7月第3土曜日・日曜日
主催 洲崎神社



吊るされた提灯に、数人の氏が丁寧に火を灯していく。ロウソクの火の揺らぎが美しい。

中区栄にある洲崎神社は、
天王信仰を集めた由緒ある社だ。
7月に行われるちようちん祭も、
ルーツは江戸時代まで遡る。
例年、大勢の人出で賑わっている。

洲崎神社における提灯の献灯は、一説には江戸時代初期頃には始まっていたとされる。かつてはひと月にわたって続いたともいう。

近世名古屋を代表する 天王祭りのひとつ

古くは「広井天王」や「天王崎天王」とも呼ばれた洲崎神社

社。近世名古屋城下の天王信仰を集めたことで知られている。その祭り・天王祭りは、牛頭天王を祭ることで、疫病を防いだり、さまざまな災いや罪を流し去ったりしたいといった願いが込められている。灯りは祭りの場であることを示すが、その華やかさから天王祭りではたくさんさんの提灯が

提灯の明かりが美しく揺れる 名古屋中心街の天王祭り



すべての提灯が灯ると、かなりの明るさとなる。



普段は静かな境内だが、常に参拝がある。

用いられるようになった。

神社では、江戸時代中期の享保17(1732)年から、植物の葎に疫病神を漂着させて流す「御葎流し」や境内の西側を流れる堀川で「船祭り」を始めたようだ。現在、「天王祭り」というと、天王総社である津島神社(愛知県津島市)の宵祭り(巻藁船が浮かぶ様子)を思い浮かべる方が多いと思うが、その津島神社天王祭と同様に、かつての洲崎神社の天王祭りは川祭りとしての性格を強く持っていた。

たくさんさんの提灯が 奉納された境内

洲崎神社の例大祭・ちようちん祭は、毎年7月第3土曜日・日曜日に開催されている。その名の通り、祭りではたくさんさんの提灯を奉納。辺りが暗くなった午後7時頃から、境内に吊るされた提灯のロウソクに、氏がひとつずつ火を灯していく。その数は800個にもぼるといふ。提灯の明かりに照らされて幻想的な雰囲気になると、近所の人びとが続々と集まり参拝していく。その場で提灯を購入して



『名古屋名所団扇絵』天王崎祭礼(名古屋博物館所蔵)

献灯する人や、無病息災を祈願する茅の輪をくぐる人の姿も。子どもたちは、並ぶ出店で祭り気分を満喫しているようだ。市街地中心に立地する神社ながら、昔懐かしい夏祭りの風景を見ることが出来る。宮司によると、市外からの観光客や外国の方も見物に訪れるという。「特に、地元の子どもたちに見てほしい。自分の住む町で素晴らしい祭りが開かれていると、誇りに思ってもらえたら、これほどうれしいことはありません。準備は大変ですが、これからも続けていきたいと思っています」



茅という植物で編んだ輪を、8の字にくぐり抜ける。

にぎやかな祭り

その後、祭りは中断するが、尾張藩士の高力猿猴庵(1756~1831)が記した『金明録』には、江戸時代後期の文化元(1803)年に再興したとの記述がある。洲崎神社の氏子である武士と町人が、提灯を飾った船を出したそうだ。

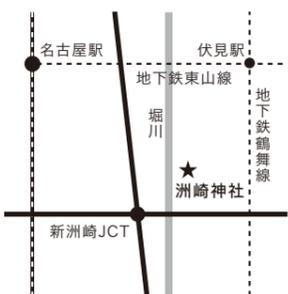
高力猿猴庵は『尾張年中行事絵抄』でも洲崎神社の祭りを取り上げ、他の天王祭りよりもにぎわっていると紹介している。挿絵には、堀川に巻藁船が浮かび、洲崎神社の境内や道沿いに提灯が飾られた風景が描かれており、多数の見物客が集まった祭りだったことがわかる。『名古屋名所団扇絵』の天王崎祭礼でも、同様の景色が描かれている。

明治20(1887)年頃には船祭りは途絶えた。大正時代にかけては旭廓の遊女たちの信仰をあつめ、その後次第に提灯は消えたが、今再び、境内を中心に祭りが続けられている。ところ狭しと飾られている提灯に、かつての様子をしっかりと感じることができる。

SCHEDULE

午前~夕方 神事
19:00 献灯(ロウソクに火を灯す)
20:00 献灯(再び火を灯す)
21:00 終了

※両日とも同じスケジュール



10mの提灯山と木遣り音頭が祭りのシンボル



平針・原・平針北婦人会を中心に、太鼓の音で盆踊りが行われる。

居の前の広い駐車場の中央に据え付けられた、高さ10mほどの文字は、夏の夜空に浮かんでいるように見える。

これは、天王祭の飾り物として名古屋市内で広く見られる「提灯山」の一種だ。市域北部で出される提灯山は、一本の柱に傘のように提灯が何段も吊るされる立体的なものが主流である。それに対し、針名神社天王祭の提灯山は平面的だ。大きな二本の柱を平行に立て、鉄骨のポールを組み合わせて高さ10mほどのヤグラを作り、そこに提灯を並べていく。

夜空に浮かぶ「天王祭」の文字

毎年約2000人もの見物客が集まるといふ針名神社天王祭。この祭りで最も印象的なのは、提灯を並べて表現した「天王祭」の文字だろう。鳥

味わい深い木遣りの歌声

提灯山を組み立てるのは、平針木遣り音頭保存会のメンバーだ。木遣り音頭とは、木材や石を運ぶ時に歌う作業歌で、祝い歌でもある。名古屋城築城時、石を運ぶ際などに



提灯山の下で、木遣り音頭を披露する。

歌われていたとの伝えも。ここ平針では現在は16曲の木遣り音頭が伝承されている。

提灯山の組み立てが始まるのは、朝7時頃から。地面に寝かされた柱に提灯を取り付ける。正午頃には、くくり付けたロープをクレーンで引っ張って柱を起す。この柱の引き起こしは、かつては人力で行われていた。なかなかの重労働だ。土気を高めるように、木遣り音頭を歌ったという。

提灯を飾った柱を立て起こし、周りで盆踊りなどをする行事を「提灯トボシ」と言い、神社が所蔵する『針名神社誌』によると、昭和初期までは、近くを通る飯田街道沿いで夏の間に何度も柱を立てていた。

保存会のメンバーは約30人。高齢化が進み、後継者不足が心配の種である。メンバーのひとりはこの祭りに木遣り音頭は欠かせないもの。楽譜もなく、口伝だけで400年もの間受け継がれてきた地域の宝。子どもたちにぜひ覚

針名神社天王祭

開催日 毎年7月第3月曜日(祝日)
主催 針名神社



天白区平針にある針名神社では、毎年7月の海の日に天王祭を開催。高さ10mの提灯山が引き起こされ、木遣り音頭が披露される。壮観な光景を見ることが出来る。

子どもたちを見下ろす巨大な提灯トボシ

現在、市内でほかに提灯トボシを行っているのは守山区上志段味や下志段味、西区八坂神社など限られた場所だ。ここ針名神社天王祭の提灯トボシ



尾治針名根運命(おわりはりなねむらじのみこと)を主祭神として祭る。本殿前の東側に、天王社がある。天王社は、かつては飯田街道沿いにあった。

シは、昭和初期に一度中断したが、昭和57(1982)年に復活したものだ。

祭りは午後6時頃より、提灯山の下で木遣り音頭が披露される。およそ1時間にわたる木遣り音頭の唄声が薄暗い空に響く。人出がどっと増えてくる午後7時を過ぎると、祭りはピークを迎え、「天王祭」の柱をぐるりと取り囲んで盆踊りが行われる。

祭りの主催者である針名神社の宮司も伝統を守る重要性を痛感しているひとりだ。「一度失ったものは、二度と取り戻すことはできません。地域で長く続いてきた祭りは、もちろんなくしてはいけません」

の。次の世代へときちんとした形で残していきたいと思ひます」

SCHEDULE

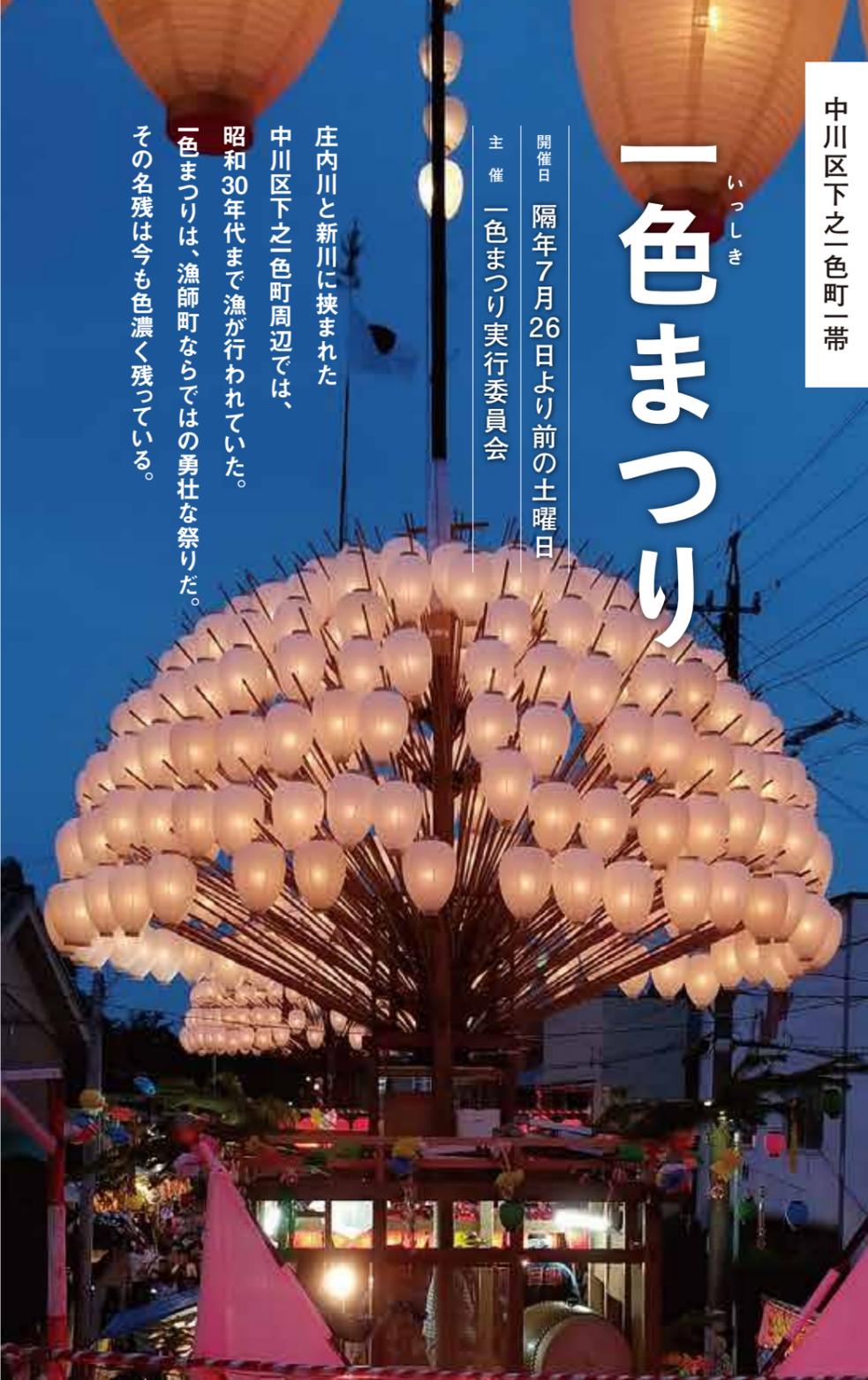
- 午前 社殿で祭典・直会
平針木遣り音頭保存会による提灯山の準備、引き起こし
- 18:00 木遣り音頭披露
- 19:00 盆踊り
- 21:00 終了



一色まつり

開催日 隔年7月26日より前の土曜日
主催 一色まつり実行委員会

庄内川と新川に挟まれた中川区下之一色町周辺では、昭和30年代まで漁が行われていた。一色まつりは、漁師町ならではの勇壮な祭りだ。その名残は今も色濃く残っている。



[右]お椀のように提灯が飾られた巻藁屋形。[左上]大きな神楽屋形。4基ある。[左中]手際よく提灯を飾っていく。[左下]昼祭りの巻藁屋形の様子。



大きなカグラが見どころ

中川区下之一色町周辺は、かつて伊勢湾でも有数の漁師町だった。昭和34(1959)年の伊勢湾台風のものち漁業を取りやめているが、昭和20年代には漁師は1200人以上、漁船は400隻以上を誇ったという。

一色まつりは、下之一色の氏神である浅間社の祭り。本来は、新川堤防上に祀られていた天王社の祭礼の流れを汲んでいる。祭りのシンボルは浅間社参道前に飾られた「巻藁屋形」と呼ばれる木組みの造り物。かつて天王祭の出し物として船の上に組まれた屋形だ。

大きな屋形や道踊りに残る 漁師町の川祭りの風情

祭りは、朝8時頃から始まる。一部、二部などと呼ぶ祭りの組が、「カグラ」と呼ばれる神楽屋形を曳いて町内を巡行する。高さ3mほどもある屋形は、金箔の彫刻で豪華だ。江戸時代後期の製作と言われる。神楽屋形は午後2時頃には浅間社に集まり、揃いの浴衣を着た子どもたちが行列しながら踊る「道踊り」や太鼓囃

子が奉納される。こういった「昼祭り」に引き続き、慌ただしく夜に向けて準備が始まる。献灯のため、人々は屋形に提灯を吊るした竿を半球状に手際よく飾っていく。実行委員会のひとりには、「悪霊を封じ込めるため、お椀のように飾ります」と話した。天王祭りは災いや罪を流す願いが込められている。

打ち上げ花火に 歓声が

陽が落ちる頃になると、大勢の見物客が集まってくる。まるで提灯の明かりに吸い寄せられるようだ。彼らのお目当ては、打ち上げ花火。夏の夜空に大輪の花がいくつも咲き誇る。新川の水面に映る花火もまた、色鮮やかで美しい。実行委員会のひとりには「これだけの規模の打ち上げ花火を地域主体で行っているところは、市内でもあまりないのでは」と胸を張った。

漁師町ならではの 川祭り

一色まつりは、二方を川に囲まれた土地特有の川祭りが基盤だ。戦前にかけて、祭りの中心はもっぱら船だった。道踊りも、当時は船に飾る造り物を担いで浅間社から川べりまで練り歩いた行事だ。若者たちは組ごとに、打ち出の小槌や相撲取りなどの縁起の良いモチーフの張り子を作ったという。日中には、張り子や旗を飾り付けた華やかな船で航行。夜には、明かりを灯した提灯を載せた巻藁船が新川を進んで



祭りのフィナーレを飾る打ち上げ花火

だ。神社の前で船体を回すなど、船の操作技術に長けた漁師の「見せ場」もあったという。昼も夜も何艘もの船が川面を進む勇壮な祭りであっただろう。

SCHEDULE

- 08:00 各町内で神楽の巡行が出発
- 11:50 木藪公園に集合、一旦解散
- 13:00 南川田公園より神楽4基で巡行出発
- 14:30 浅間社到着
太鼓囃子・道踊りの奉納
- 17:30 巻藁屋形の献灯
- 20:20 花火打ち上げ
- 21:30 終了



[上]浅間社の社務所には、かつての祭りの様子を写した写真が大切に飾られていた。[下]大勢の見物客でにぎわいを見せる。

「時代の変化とともに内容も変わっていますが、祭りを大切にしている思いは、絶やしてはならないと思っています」。そう語る実行委員のひとりには、地元の小中学校で町や祭りの歴史を伝える出張授業を行っているそうだ。その強い思いがあれば、漁師町ならではの伝統は、次世代へと確実に受け継がれることだろう。

蛇池神社 万灯流し大祭

開催日 毎年8月20日
主催 蛇池神社世話人会



蛇池に浮かべられた万灯。風に流され、散り散りになる。



近所の人びとが多数集まり、盆踊りに参加する。

大蛇を退治するために
織田信長も訪れたという西区蛇池。
その地で行われる夏祭りは、
代々語り継がれた伝説と絡み合った
この地域ならではの大切な行事だ。



西区に伝わる 夏の風物詩

西区比良にある蛇池は、5分もあれば歩いて一周することができるといわれる小さな池だ。ほとと蛇池神社があり、周辺は蛇池公園として整備されている。

実は織田信長との縁も深い。大蛇を退治するため、信長も入ったという伝説の地でもあるのだ(『信長公記』)。

毎年8月20日に開催されて

いるのが、蛇池神社万灯流し大祭。古くから開催されてきた地元の夏の風物詩だ。

仏式・神式での神事が社殿で行われたのち、午後7時から神社前の広場で盆踊りが奉納される。クライマックスは午後8時過ぎ。たくさんの方々が蛇池に流し祓う「万灯流し」神事が厳かに執り行われる。続いて、煌びやかな金魚花火や仕掛け花火が上がり、蛇池の周りに集まった人々の顔を明るく照らす。

大蛇伝説が残る池に揺れる 幻想的な万灯の灯り

市内では珍しい 幻想的な光景

万灯とは、手のひらほどの大きさの曲物にロウソクを乗せ、色紙で覆ったものだ。参加者は「家内安全」「病氣平癒」などの願い事を紙に書いて祈願する。

宮司がお祓いを済ませた万灯は、白装束に身を包んだ厄年の男性が小舟に乗せ、池の中央へ設けられたご神体・浮代へと運ばれる。浮代へたどり

着くと、万灯は男性の手によって、そっと浮かべられていく。赤、黄、青…。ろうそくの炎

で色とりどりに照らされた万灯が、漆黒の水面でたゆたう様は実に幻想的。美しい眺めだ。

龍神信仰に伴う 祭礼行事

蛇池神社では春にも大きな祭りが行われる。4月第2日曜日に開催される「櫃流し」神事だ。

SCHEDULE

- 15:30 神事
- 19:00 盆踊り
- 20:00 宮司が万灯に祈禱を捧げる
- 20:10 白装束の男性が万灯を小舟に乗せ蛇池中央へ
- 20:15 万灯流し
- 20:30 花火打ち上げ
- 21:00 終了



創建は明治42(1909)年といい、本殿は昭和38(1963)年に建てられた。



[上] ご神体(浮代)。当日の朝、社殿から出され池の中央に設けられる。[中・下] 万灯は、ひとつずつ手作りで準備。お祓いが済まされると灯りが灯される。

お櫃と呼ばれる曲物に赤飯を盛って蛇池に流すこの神事は、言い伝えがある。ある日、惣右衛門という商家の妻が小さな蛇を助けたが、乳飲み子を産んで亡くなってしまう。その子は乳母が大変にかわいがって育てた。役目を終えて乳母が去るとき、家人に見送らせたところ、蛇池

に黒い雲が垂れ込み、金鱗の大蛇が池の中へ没しようとするのを見た。実は乳母は、蛇池の龍神の化身だったのだ。惣右衛門は、乳母へのお礼として蛇池に赤飯を流したという。

こういつた龍神信仰は名古屋市中心のあちこちに見られる。大蛇に関わる伝説が残る

だけでなく、その多くがご利益や行事を伴うことや、寺社だけでなく地域や個人など担い手がさまざまであることに特徴がある。

現在、祭りを支えるのは長らく地域で暮らしてきた人々だ。祭りの運営に携わってきた70代の男性は、「子どもの頃の記憶を頼りに、見よう見まねで受

け継いできた私たちの思いを、次の世代に託していければ。地域にとって大切な行事なので、いつまでも続けてほしいと願っています」と語る。

地域ですと語り継がれてきた蛇池にまつわるストーリー。万灯流しは、そんな伝説と密接に絡みあう、この土地ならではの祭りである。



綱を手でたぐり、船は中央へと進む。ご神体のそばに、そっと万灯を浮かべる。

おおだか

大高祭り

開催日 毎年10月第1日曜日

主催 大高祭り実行委員会

酒蔵や商家など、古い建物が多く残る緑区大高町。五穀豊穰を祝う大高祭りは、江戸時代から続く伝統行事だ。地域住民の心の寄りどころとなっている。



【右】大浜街道を練り歩く一行。ここは大行列のスケールが味わえる。【左上】町並みを抜け、八幡社へと到着した傘鉾車や松車。【左下】ひととき目を引く赤い顔の大人形が、先導を務める「ええ狸々」。頭は弘化4(1847)年から使われている。

情緒ある町並みに続く、

豊穰を祝う大行列

祭りに華を添える 傘鉾車に狸々

車の上に立つ赤い幕を吊り下げた傘は「傘鉾」である。「風流」と呼ばれる華やかな祭りの出し物のひとつで、その歴史は中世まで遡ることができる。江戸時代になると、名古屋城下やその周辺では、祭礼の際に捧げ持ったり飾ったりしていたそうだ。その後、江戸時代後期になると、車輪が付いた傘鉾車と対となる松車は、高力猿猴庵(1756〜1831)による『尾張年中行事絵抄』の「氷上社祭」挿絵にも見られるものだ。

現在使われている花車の中には、修繕されながら当時より使われているものもあると言ふ。組ごとに趣向を凝らした飾り付けがなされ比べ見るの



氷上姉子神社には出店も並び大勢の見物客が集まる。

も楽しい。

行列の先頭を歩くのは、「狸々」と呼ばれる大人形。竹組の胴体に、紙を貼り重ねてつくったハリボテの顔が差しこまれていく。東海道沿いの町々では馴染み深い、そのほかの地域ではあまり見かけるところがない。これも近世後期の名古屋における練り物風流のひとつとして発達したものである。

祭りがピークを迎える氷上

SCHEDULE

- 07:45 行列が秋葉社前を出発
- 08:10 津島社到着 神事・参拝
- 10:00 八幡神社到着 神事・参拝
- 11:00 一旦解散
- 12:45 秋葉社前を再出発
- 13:45 氷上姉子神社到着 神事・参拝
- 15:20 氷上姉子神社を出発
- 16:00 秋葉社前に集合、解散



新町組の松車。修繕されているが、内部に天保年間の墨書きがあるという。

伝統を 未来へつなぐために

一時は後継者不足に陥ったが、現在は若い世代を中心に伝統が受け継がれている。三代の世話役の一人はこう話す。「伊勢湾台風が起こった六

十年前、先人たちは倉庫の天井を壊してまでも水害から花車を守ろうとしたそうです。それだけ祭りを大切にしていた証拠。その灯を絶やさず、未来へつないで行くのが、私たちの役目です」

囃子を囃す娘の様子を心配そうに見守る四十代の男性は「私も子どもの頃、笛を吹きました。娘も同じ経験をしてきて、感慨深いですね」と目を細めた。

親から子、またその子へ。伝統はこうして受け継がれていくものなのだろう。

町を練り歩く行列

毎年10月の第1日曜日に開催される大高祭りは、五穀豊穰への感謝を示す氷上姉子神社の例祭だ。同神社は熱田神宮の元宮とも言われ、大高町で暮らす人々は親しみを込めて「おひかみさん」と呼んでいる。

祭りは早朝、「江明の辻」と呼ばれる狭い路地が交差する角の、秋葉社という小さな社から始まる。法被をまとった氏子や子どもが、傘鉾車や松車と呼ばれる花車を曳きながら、囃子を囃し町内を練り歩く。最後には、町内の9つの地区(組)が氷上姉子神社に大列になって集まる。境内では神事が行われ、囃子の奉納や花車の曳きまわしによる参拝が行われる。こういった花車は、南区笠寺や緑区鳴海・有松など市内東南部の東海道沿いの町々に見られるものだが、18輛も曳き出されるのは大高祭りのみ。圧巻のスケールだ。

『尾張年中行事絵抄』秋之部八月上「氷上社祭」(公益財団法人東洋文庫所蔵)より。氷上姉子神社の境内に花車を曳いた行列が入っていく風景。



中之切の舞。まるで手遊びするように舞う。

烏森三社秋祭りでは奉納される「子供獅子」は、かつて市内西部の各所に伝えられていたが、いつしか、ここだけになってしまったという。少子化の影響で踊り手が少なくなる中、伝統の火を消すまいと続けられている。



豪華な彫刻の神楽屋形

を練り歩く獅子舞はよく見られるが、烏森三社秋祭りの「子供獅子」は、順に三社を巡り、拜殿で小学5年生の男子によって舞が披露されるというものだ。南之切と中之切の「子供獅子」は、獅子頭をつけた1人、その左右に面をつけた2人が並び、鈴が付いた輪を身体や床に打ち付けながら舞う。

江戸時代後期から近代にかけて、旧海部郡から名古屋西部では、嫁獅子の格好で演じる獅子芝居や曲芸獅子舞が流行していたことが知られている。烏森町が伝える「子供獅子」は、これらに関係が深い。

舞手の着物には、黄色の短い襷が締められている。かつて小学1年生の男子が産着を着て舞った名残だという。太平洋戦争の前後には大人が舞を披露していた時期もあったそうだ。古くから祭りを知る町内の長老は「私たちが子どもの頃、舞手は憧れの存在。その座を競ったものです。少子化の影響で、舞手を採すのも大変な時代ですが、なんとか伝統を守らなければなりません」と話す。



神楽屋形の巡行には、神楽太鼓が付き添って打ち鳴らす。締太鼓の甲高い音と笛囃子の音でにぎやかだ。

烏森三社秋祭り

開催日 本祭り…毎年10月第2月曜日(祝日)

夜祭り…毎年旧暦8月15日、8月25日、9月16日

主催 烏森氏子総代会

子どもたちが披露する 鈴や御幣を使って舞う嫁獅子

地域のシンボル・カグラ屋形

中村区烏森町にある三つの神社(天神社、神明社、八幡社)



無病息災を祈りながらお湯を口にしている参加者

は、あわせて烏森三社と呼ばれている。そこを舞台に行われるのが烏森三社秋祭りだ。町は3つの地区に分かれ、以前は南之切、中之切、町之切と呼ばれていた。祭りでは、それぞれの地区が持つ「カグラ」と呼ばれる神楽屋形の巡行が行われる。龍や獅子などが彫刻され、金箔で飾った豪華な屋形だ。烏森町一帯で曳き回され、併せて獅子舞のひとつである「子供獅子」や曲太鼓が奉納される。

市域西南部には、神楽屋形を所有する地区が多い。華麗に装飾された神楽屋形は地域のシンボルだ。かつては市内に140あまりあったと言われていたが、その半数が太平洋戦争や伊勢湾台風などで失われてしまった。また、神楽屋形との関係が深い獅子舞も、ほとんどが消えてしまっている。

子どもが獅子頭を持って町内

鈴の音が響く「子供獅子」

一方、舞を披露した男子は「緊張したけど集中して、練習通りに踊れました。とてもいい経験ができました。やってみてよかったです」と笑顔を見せた。祭りではこのほか、湯立神事も行われる。三社も各拜殿前には、お湯がグラグラと煮立った釜を用意。このお湯を口にすると、1年間健康で過ごすことができるという。

旧暦に行われる夜祭り

八幡社では旧暦の8月15日、天神社では旧暦の8月25日、神明社では旧暦9月16日に、夜祭りを開催。午後7時頃、当番の神社にほかの2地区が大鼓を打ち鳴らしながら参詣する。

かがり火と提灯の明かりに照らされ、夜の闇に浮ぶように見える拜殿で、子どもたちが舞を披露する。本祭りと同じ舞だが、見る者をより厳かな気分にする。時間が許すなら、夜祭りと本祭りを見比べてみるのもよいだろう。



町之切の舞。並んだり、向かい合ったりしながらしなやかに舞う。



烏森神楽太鼓会による曲太鼓の奉納。八幡社にある氏子会館で練習をしている。

SCHEDULE

- 09:00 各町内で神楽屋形の巡行が出発
- 12:00 一旦解散
- 13:00 願隆寺北から神楽3基で巡行が出発
- 13:30 天神社にて神事、「子供獅子」・曲太鼓の奉納
- 14:30 神明社にて神事、「子供獅子」・曲太鼓の奉納
- 15:30 八幡社にて神事、「子供獅子」・曲太鼓の奉納
- 16:00 各社へ戻り、終了



※ 嫁獅子…獅子頭を着け、女形の着物をまわって舞うもの。